あとがき

編集委員　坂井 宏光

市川智史前編集委員長と現在の渡辺隆一委員長に、私は未だにオンブにダッコで編集委員を務めているので、この「あとがき」を書くのは何か後ろめたい気持ちである。3年ほど学会誌「環境教育」の編集にかかわり、私は実に広領域の環境教育実践活動や理論・倫理観などがあるものだと感心させられてばかりである。しかし、中には、片手間に環境教育をしながら片手間に論文を書いているというような印象を受けるものもあり、我が身を省みてほっとさせられる。ではなかった、これではいけないなと思いつつ「人の振り見て」と自分に言い聞かせている。

さて、私の最近の「環境教育」雑感を述べてみたい。私の大学での仕事がら、環境教育を学生や地域に根づかせ、人材育成に寄与したいと思いつつ、自分の能力不足に悩む日々である。そして、大人のようにあれこれ人目や社会性に気を取られることなく、素直に遊び、学ぶ地域の子ども達には教えられることが実に多くある。その中で、私が考えた環境教育の一つの形は、身を美しくすると書く「躾（しつけ）」にあるのではないかと言うことである。

今年は、リオ・サミット＋10の年でヨハネスブルク・サミットが8月26日～9月4日まで開催され、本学会員も参加されていたようである。歴史認識に基づくと、ここでは、「Only one earth」から「Sustainable development」へ、そして、その「持続可能性」が今や国際的なキーワードになっている。20世紀は、科学技術と経済発展が目覚ましく、地球環境や地域環境改善を図ってきた。が、一向に環境問題の深刻さは解消されてこなかった。それどころか、有害化学物質問題一つとっても地球規模で深刻さを増している。これは一面では、人間の利便性への限りない欲求や欲望から生じる社会環境問題には、科学技術は無力であることを物語っている。国際的な環境教育の趨勢も気になるところであるが、足元の国内では子ども達の目を曇らせるような、牛海綿状脳症（ＢＳＥ）や国会議員の疑惑問題、食品偽装問題、輸入農産物残留農薬や違法農薬問題、原発虚偽報告などの社会環境問題の「持続的な悪循環」があり、これらはその根底に環境教育の遅れが起因しているのではないかと考えざるを得ない。しかし、環境教育の普及は、これらの悪循環を断ち切り、真面目に働くものが報われる真に豊かな社会の発展に寄与できるだろうか。

企業人も政治家も消費者も家庭環境や地域環境の中で育てられている。問題の根っこは、家庭環境や企業環境などでの躾の問題が一番重要であり、地域環境問題解決の早道ではないかと私は真面目に考えている。その延長線上で、地球環境問題も解決が容易になるのではないか。一方で、環境マネージメントに関する企業研修内容は、整理・整頓・清掃・清潔・躾の５Ｓ活動が中心になっている場合もある。文章足らずになってしまうが、結論として、持続性の条件は環境保全型ハイテクとローテクを活用しつつ、「躾」のような環境倫理観の育成を社会の発展基盤の両輪と成すことが必要であろう。

“環境教育のもどかしさ”を感じつつ、本学会誌が多くの人に持続可能な“真の豊かさ”を感じさせる社会環境の構築に少しでも貢献できることを祈念している。

編集委員会
委員長　渡辺　隆一
委員　坂井　宏光
下羽　友衛
見上　一幸
和田　武